

# ブルターニュ旅行記

松原秀雄

もう15年以上前のことであるが、何回かフランスへ、特にブルターニュ地方へ旅行する機会があった。その後も、同地方へ旅行する機会があった。以下はブルターニュに絞った紹介と旅行記である。

## ブルターニュ地方（図1、図2）

ブルターニュ地方はフランスの北西部にあり、ヨーロッパ大陸の西方に突き出た半島である。北は英仏海峡、西は大西洋、南はビスケー湾に接している。

ブルターニュ地方は冷涼な気候の地方であり、リンゴが採れる。また蕎麦も収穫される。リンゴからはシードル（リンゴ酒）が造られ、蕎麦粉ではガレットと呼ばれる蕎麦粉クレープが作られる。ガレットはハム、たまご、マッシュルームなどをつつんで供される。シードルを飲みながら、ガレットを食べるのがブルターニュ風とされている。

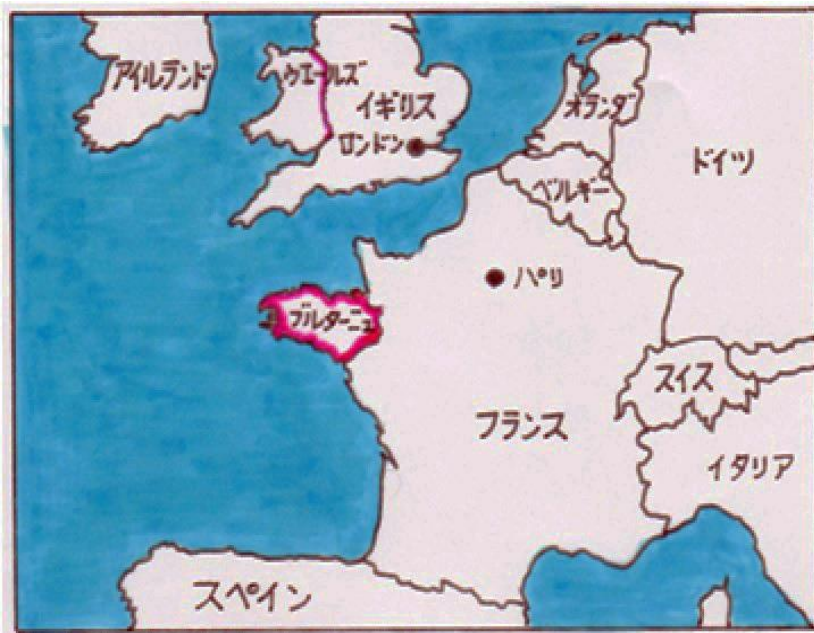


図1：ブルターニュの位置



図2：ブルターニュ拡大図

ブルターニュ地方は半島であり、北・西・南が海に面している。そのため魚介類が豊富である。特にムール貝と牡蠣が有名である。また、ブルターニュ半島南部の塩田で、伝統的製法によって作られる塩は絶妙な味わいがある。海藻の風味があり何度でも味わいたいと思った。

## ブルターニュの民族

ヨーロッパ大陸の中部や東部には、古くから、アジアから移住したインド・ヨーロッパ語族のケルト人が住んでいた。BC50年頃の8年間にローマ軍はガリア（今のフランス）へ侵攻した。ガリア戦争によってラテン人が侵入したので、ケルト人の一部はラテン人と混血し、他のケルト人は、ヨーロッパ大陸の西部やブリテン島（今のイギリス）へ逃れた。

ヨーロッパ北部やスカンジナビア半島には、古くからゲルマン人が住んでいた。気候変動・農地不足などのため、ゲルマン人はヨーロッパ中南部へ徐々に移動していた。ローマ帝国末期の5世紀頃、アジア系遊牧民のフン族のヨーロッパへの侵入に押されて、ゲルマン人は戦いながら西方へ移動した。これはゲルマン民族の大移動の第1波である。ゲルマン民族のうちのフランク族は北西フランスに、ブルグンド族は南フランスに、アングロサクソン族はブリテン島に、それぞれ移動して王国を作った。ブリテン島の中央部をアングロサクソン族が占拠したので、先に渡来していたケルト人は、戦禍を逃れて、北側のスコットランドと西側のウエールズに分かれて移動した。

9世紀にノルマン人（北方系ゲルマン人）による第2波のゲルマン民族大移動が起こり、ノルマン人がブリテン島に侵入してきたので、ウエールズのケルト人は海を渡ってアイルランド島と欧州大陸のブルターニュの地に移動した。ブルターニュへ移動したケルト人は3つの王国を作った。ブルターニュの地名は、大ブリテン島に対して、小ブリテンを意味している。ブルターニュの3つの王国は、やがて統一されて一つの王国となった。

ブルターニュでは、フランスとの境界線上に、石造りの城壁を備えた城を沢山造った。これはフランスの攻撃に備え、戦うために造ったものである。ブルターニュ王アラン2世は幾度かの戦いの後に、フランス王ルイ4世に臣従の誓いを表したので、それ以後ブルターニュは王国ではなく公国となった。ブルターニュ公国がフランスに併合され、この公国が法的に廃止されたのは、フランス革命中の1789年だった。

歴史的背景によって、ブルターニュ人（=ケルト人）とフランス人（=ラテン人、フランク人、ブルグンド人）は、もともと人種が異なる。しかし、現代のフランス共和国の公用語はフランス語であり、今ではブルターニュでは誰もがフランス語を話している。しかし19世紀以前にはフランス語ではなく、ブルターニュ西部ではブルトン語、ブルターニュ東部ではガロ語が使われていた。ブルトン語はケルト語の一種である。19世紀末～20世紀に義務教育制度が作ら

れ、ブルトン語の使用が禁止され、親は子供にブルトン語を教えなくなった。このため、この言語は絶滅の危機に瀕していた。1970年、地元当局はブルトン語再生のため、その使用の奨励を始めた。今では、ブルトン語で教育を行う学校が開校している。ガロ語は文字を持たない言語であり、奨励もされていない。

## レンヌ (写真：A1～A4)

レンヌは、ブルターニュ地方の最大の都市であり、パリから約310km、TGV（ティージェーヴェー、フランスの新幹線）によって2時間で到達することができる。モン・サン・ミッシェル観光の起点となる町として知られている。レンヌの地元産業はプジョーシトロエンの自動車産業である。また総合大学が2つあり、そのほかに各種の公立・私立の高等教育機関が数校あり、学生人口6万3000人の学園都市である。町の全人口は約21万人である。

レンヌの中央部に幅の広いヴィレーヌ川が流れている。冬には白鳥が飛来して泳いでいる。レンヌ旧市街の東部にタボール公園がある。10ヘクタールの敷地の中に、各種の植物が植えられており、鳥小屋や植物展示館やカフェなどがあり、市民の憩いの場となっている。フランス全土の公園の中でも、高く評価されている。旧市街西部にサン・ピエール大聖堂がある。この聖堂は、6世紀頃から司教区の本部とされ、それが12世紀に建て替えられ、さらに16世紀に建て替えられて現在に至っているものである。



写真A1: レンヌの中央の川



写真A2: タボール公園

レンヌの町の随所にハーフティンバー様式の中世の建築物が残され、現在でも使用されている。ハーフティンバー様式とは、建築木材の前側半分を外部に露出させ、後側半分をモルタルで塗り込めた建築様式である。ブルターニュ地方の他の町でも、この様式の建物は多く残され使用されている。

レンヌでは、土曜日に朝市が開かれる。野菜や魚や乳製品や花などが仮設の

台の上に広げて売られている。大勢の市民がこの日に買い物に集まり、午前中に商品は、ほとんど売り切れてしまうほどである。この朝市は、フランスで2番目に大きいものであると言われている。

フランスの他の都市も同じだが、市街の集合住宅（アパート）は表通りの歩道の縁に接して、隙間なく連続して4～5階建てのものが建てられている。一見、その住民は樹木などの自然環境に接する機会がなく、これで心の安らぎや、日照や通気は大丈夫なのかと思われる。しかし、これらの集合住宅は、市街のそれぞれのブロックの周囲部に、中庭を取り囲んで建てられているものであり、集合住宅の共同の入口から中庭の方へ入ることができる。中庭には植木を植えた庭や、駐車場がある。駐車場は地下の場合が多い。各住居棟への入口は、この中庭の側にある。現代のフランスでは、セキュリティのため、このような建て方になるのであろうと思われる。

日本では、集合住宅は表通りから庭などによって隔てられている。敷地内に複数の集合住宅がある場合は、各棟は平行に配置されている。住居棟の周囲には庭や私道が設けてあるので、自然環境は住居棟の周囲に十分にある。日本では中庭を取り囲んで建てられた集合住宅はあまり見かけない。



写真A3：ハーフティンバーの建物



写真A4：レンヌの朝市

### モン・サン・ミッシェル（写真：B1～B4）

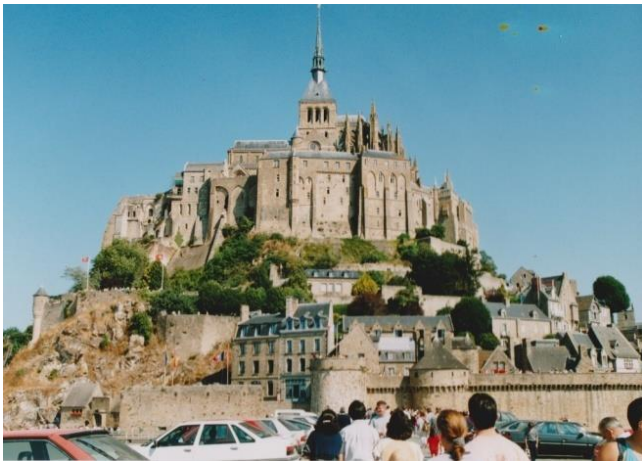
モン・サン・ミッシェルは、サン・マロ湾に面して、ノルマンディー地方の南西部、ブルターニュとの境界に近いところに位置している。レンヌの北方60kmの地にあり、レンヌからバスが運行されている。約1時間20分で到達できる。

モン・サン・ミッシェルは、聖ミカエルの山という意味である。聖ミカエルはキリスト教の大天使の名であり、有翼の天使画像で知られている。966年にノルマンディー公リシャール1世がベネディクト会の修道院をサン・マロ湾に浮かぶ島に建て、これが増改築を重ねて13世紀にほぼ現在の形になったと

言われている。中世以来カトリックの聖地として、多くの巡礼者を集めてきた。イギリスの侵略に対する要塞となったこともある。

サン・マロ湾はヨーロッパでも潮の干満の差が最も激しいところとして知られ、干満の差は15m以上あるとされる。昔、引き潮の時に干潟となっていたところを歩いていた多くの巡礼者が、満ち潮の時に猛烈な速度で押し寄せる潮に飲み込まれたといわれる。このため1877年に陸続きの道路が作られ潮の干満に関係なく島に渡れるようになった。しかし100年間で2mの砂が堆積して、島の周囲で急速な陸地化が進行し、島の間際まで潮が来ることはなくなった。このため、昔の姿を取り戻すために2009年に陸続きの道路がとり壊され、2014年に新たな橋が作られた。

島の入口にある門をくぐって進むと、参道には、土産物店、レストラン、ホテルなどが軒を連ねる。修道院まで伸びる参道は、多くの観光客でにぎわっている。レストランでは、名物のオムレツや、ガレット（蕎麦粉クレープ）を食べることができる。修道院に入るといくつかの大広間を通して頂上部に達する。頂上部の側部に、列柱廊で囲まれた広い中庭がある。修道士たちの憩いの場になっていたと言われる。



写真B 1 : モン・サン・ミッシェル



写真B 2 : モン・サン・ミッシェルの入り口の門



写真B 3 : モン・サン・ミッシェルの参道



写真B 4 : モン・サン・ミッシェルの柱廊の庭園

## サン・マロ （写真：C1～C4）

サン・マロはモン・サン・ミッシェルの近くのサン・マロ湾に面したブルターニュ地方の港町である。12世紀頃から築かれたと言われる高い城壁がある。これはイギリスの侵略や海賊から住民を守るためのものであった。

サン・マロの城壁の外側に大きい港がある。昔、サン・マロ港には、フランス王公認の海賊や私掠船がいて、この港を根拠地として、英仏海峡を通るイギリス船に通行料を課したり、広い範囲から富を持ち帰ったりした。お互い様である。カナダの発見者とされるジャック・カルティエはサン・マロに住み、サン・マロから出港したとされる。

城壁の正面に設けられた門から入ると、城壁に囲まれた市街地があり、そこには古い石造りの建物が沢山ある。城壁へは登ることができ、城壁の上は市街地を取り囲む遊歩道になっている。城壁の西側は海に面しており、夏は浜辺で海水浴を楽しむことができる。また、市街地には、土産物店、カフェ、レストラン、ホテルが軒を連ねている。古い教会もある。



写真C1：サン・マロの外観



写真C2：サン・マロの城壁の入り口



写真C3：サン・マロの城壁の遊歩道



写真C4：サン・マロの市街

## ディナン（写真：D 1～D 4）

ディナンはサン・マロの南方約21 kmのところであり、城砦に囲まれた都市である。ディナンの町は主に丘のうえにある。市内にはハーフティンバー様式の家が多く残っている。



写真D 1：ディナンの城壁



写真D 2：ディナンの城壁から見た町



写真D 3：ディナンの町の全景



写真D 4：ディナン市街

## フジェル（写真：E 1～E 4）

フジェルはレンヌから北東に約45 kmにあり、かつて独立国だった頃のブルターニュ公国とフランスの国境近くに位置する町である。この町には、11世紀に作られた巨大な城、むしろ要塞と言うべきものがある。これはフランスの侵略に対してブルターニュを守るための城であった。広い中庭があり、戦争が起こったときには、庶民はこの要塞の中へ避難するようになっていた。数々の戦争で内部はほとんど破壊されてしまっているが、厚さ3 mの堅固な城壁と、各所に設けてある塔は今でも偉容を誇っている。



写真E 1 : フジエールの城壁



写真E 2 : フジエールの教会



写真E 3 : フジエール城の遠景



写真E 4 : フジエール市街

## カンペール (写真 : F 1 ~ F 5)

カンペールはブルターニュの西端部の町である。レンヌの西方約180km、レンヌからTGVに乗って、約1時間で到着する。この町は「カンペール焼き」と呼ばれる独特の陶器が有名である。カンペール焼きは1690年頃から操業されているアンリオ・カンペール社のもので、この会社は現在のフランス企業の中で最古の会社である。カンペール陶器の最大の特徴はカンペールタッチと呼ばれる職人の絵付け技術にある。転写シートなどは使わず、すべて手作業で絵付けされる。絵柄はブルターニュの民族衣装を着た素朴な農村の男女や、花などである。

カンペールは、フランス中央部から離れ、ウエールズ以来のブルターニュの古い伝統を守ろうとする気風が強い。カンペールの町を歩いていたとき、ブルターニュの旗を先頭に掲げ、ブラスバンドを従えた大勢の人のデモ行進に出会った。スコットランドのように、ここでもブルターニュ独立運動のデモかと思ったが、ブルターニュの伝統を守る会の運動らしかった。同じケルト人の国スコットランドでは、独立運動があり、否決はされたが国民投票までやったので



ある。カンペールではブルトン語も使われている。道路標識もフランス語とブルトン語の2言語表示となっている。

現代のブルターニュの旗は、1923年にデザインされたもので、白黒の縞模様と11個の「アーミン」のスポットからなっている。アーミンとは日本ではオコジョと呼ばれるイタチ科の動物で、冬になると体毛が白くなるが、尻尾だけは黒のままであるため、雪の上では尻尾の黒と、黒い両目と黒い鼻が目立つため、これらが図案化されたものである。アーミンのスポットは古くからブルターニュ公国の紋章に使われており、現代でも、ブルターニュの各都市の紋章に取り入れられている。



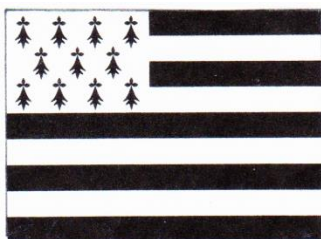
写真F 1 : カンペールの中央の川



写真F 2 : カンペール陶器の例



写真F 3 : カンペールのデモ行進



写真F 4 : ブルターニュの旗



写真F 5 : アーミン (オコジョ)

## ナント（写真：G 1）

ナントはレンヌの南方約100kmの位置にある。「ブルターニュ公の都市」の別称を持ち、最後のブルターニュ公達が住まいとしていた。ナント市の中心部には城壁に囲まれた広い中庭のあるブルターニュ公爵城がある。これはブルターニュが独立国だった時代に、フランスと戦うために造られた城だった。

ナントは、ブルターニュ地方の首都だったが、フランスへの併合後の1789年に行われた州再編の結果、現在はロワール地方の首都となっている。それはロワール地方には、この地方をまとめる大都市がなかったためと言われている。

昔、高校の歴史の時間に、「ナントの勅令」というものを習った。これは、1598年に、フランス王アンリ4世がナントで発布した勅令で、プロテスタント信徒にカトリック信徒と同等の権利を与え、ユグノー戦争を収め、フランスの国家統一の出発点となったものである。



写真G 1：ナント城の入口

## あとがき

ロワール地方にはロワール川沿いに多数の城があるが、これらは王侯貴族の居館であり、あるいは別荘である。戦いを目的に造られたものではない。ロワール川沿いの城は外観内装ともに華麗な装飾を競っている。一方、ブルターニュの城は、ロワール地方の城と違って、戦うために造られた城であるから、武骨な感じである。ブルターニュでは、中世がそのまま残っているような町が多い。特に、石造りの建物が多い。石造りの城や住宅は、耐久性があるからそのまま残る。

本稿を読まれて、「フランス」から受けるモダンな印象とは大きく異なる印象を受けられたことと思われる。フランスにはもちろん現代的なものはある。しかし現代的なものは、当たり前すぎて紹介の対象にならなかった。以上、簡単にブルターニュ地方の町々について、紹介と、旅行で見聞したことなどを述べた次第である。